

ライフスキルの国際比較による デンマーク成人教育機関の一考察

－日本とデンマークの青年を対象として－

松浦 早希・小島 理永

A Study of Danish Adult Education Institutions by Comparing Life Skills of
Young Adults in Japan and Denmark

Saki MATSUURA, Rie KOJIMA

I. はじめに

21世紀を生き抜く子ども達への教育について学校では、グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴って、高度化・複雑化する諸課題への対応ができる人材育成が求められるようになった¹。そのため初等教育から高等教育にわたっては、従来までの知識偏重型の教育とは異なり、他者と協働し課題解決ができる資質や多様な人間関係の構築ができる力の育成が重視されている。

20歳前後の青年については、国立大学保健管理施設協議会による健康調査²によると、精神的な面で「何となく不安になることが多い」と回答した大学生が全体の4割強で、「いつも孤独な感じがする」と感じる大学生は全体でおおよそ1割5分であった。また、5割弱の大学生は「人との関係で傷つくのが怖いと思っている」と回答し、他者との表面的な関わりは出来るが、深いところでの関わりは傷つくのが怖くて出来ない大学生が多い傾向が報告されている。これら精神面での不安は、自尊心の低下をはじめ抑うつ、学業成績、対人関係など社会での適応と関連していることから、大学生にはコミュニケーションに関する支援が必要であると考えられる。

精神的健康を保つ一つに、WHOが提唱している能力としてライフスキルがあげられる。ライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」³であり、WHO（川畑ほか訳、2012）によると、ライフスキルには「ストレス対処」、「情動対処」、「自己意識」、「共感性」、「意思決定」、「問題解決」、「創造的思考」、「批判的思考」、「効果的コミュニケーション」、「対人関係スキル」の10のスキルによって構成されている⁴。横山（2010）は、「学生がライフスキルを包括的に獲得することで、健康的な行動を身に付け、様々な問題を予防できることは、学生生活や卒業後の生活を送る上で有効なことである」⁵と述べている。

また、国際連合が発表している世界幸福度報告（World Happiness Report 2020）では、北欧が上位を占めている⁶。特に2020年から過去5年においてデンマークは常に上位3位であり^{7 8 9 10 11}、北欧の中でも常に幸福度の高さを保っている国であることが伺える。その理由として鈴木（2007）は、デンマークの福祉と教育は高い税金によって支えられているため教育費はほぼ無償であり、全ての国民が平等に受けられることを挙げている¹²。さらに谷（2017）は、「デンマークの教育を考える時に、フォルケホイスコーレ（Folkehøjskole）という成人教育機関の理念と存在は非常に重要である」¹³と述べている。

フォルケホイスコーレとはデンマーク発祥の教育機関であり、社会に出る前、また社会に出た後の学び直しとして、生徒は一定の期間を寮で生活をしながら学ぶという特徴がある^{14 15}。これによりフォルケホイスコーレでの教育には、デンマーク人の幸福度ならびに自尊感情に関連があると推測される。

そこで本研究では、精神的健康である自尊感情やライフスキルをもとに、成人教育機関であるフォルケホイスコーレの教育について検討するために、はじめにデンマーク特有の成人教育であるフォルケホイスコーレの歴史的背景から教育制度の成り立ちについて、文献研究より明らかにする。次に日本の大学生とフォルケホイスコーレの学生を対象とした自尊感情とライフスキルに関する実態調査を行うことで、両国の学生の特徴を明らかにする。最後に文献研究およびアンケート調査、そして筆者のフォルケホイスコーレでの留学経験（Gymnastikhøjskolen i Ollerupに2013年8月～2014年6月まで留学）より、日本の青年期に求められる教育について考察する。

II. 幸福度の観点から見るデンマークの成人教育

1. フォルケホイスコーレ誕生の歴史的背景

田淵（2017）は、「フォルケホイスコーレ^{註1)}とは、成人教育を行う公立ではない学校であり、その構想の起源は、19世紀の牧師グルントヴィ（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig）である」¹⁶と述べている。グルントヴィは、1783年9月8日にデンマークのシェラン島南東部にあるウドビイーの村で牧師の家庭に生まれた¹⁷。清水（2009）によると、その当時の教育は、「1814年に義務教育が始まり、いわゆる近代の国民教育が行政により推進されたが、暗記式の詰め込み教育や鞭をもつての体罰、教師の権威主義的な一方通行というのが当時の教育のスタイルだった」¹⁸と記されている。さらに清水（2007a）によると、「グルントヴィはオーフスのラテン学校を、無味乾燥な詰め込みの勉強、権威主義的な教師、窒息しそうな学校の雰囲気から『死の学校』と呼び、これを廃止する法案が出来たら、よろこんで一票投じると言っていた」¹⁹と記されている。これらの記述から、グルントヴィは当時の教育の在り方に対して疑問を持っていたことが分かる。野村（2010）によると、「グルントヴィのめざした教育は、自由で対等な立場での対話による相互作用、『生きた言葉』によるコミュニケーションと相互理解である」²⁰と述べ、グルントヴィがそのような教育を構想するきっかけとなったのは、「1829年から1831年にかけてデンマーク王国の援助でアングロサクソンの写本研究のため、イギリスに留学した経験に端を発している」²¹としている。岩原（1994）は「グルントヴィは1838年に生きた言葉を用いた教育理論である『生のための学校』を発表し、このグルントヴィの考えに賛同する人達

が集まって国民高等学校を作ろうという動き」²²があったと述べている。これらの文献より、1838年には既に「生きた言葉」によるグルントヴィの思想はデンマークで広まりつつあったことが分かる。高井・工藤（2014）によると、「当時のデンマークはデンマーク王国、シュレスヴィー公国、ホルスタイン公国、ラウデンプルグ公国から成り立つ連合国であった。しかし、シュレスヴィーとホルスタインの従属問題が戦争へと繋がり1864年には全ての公国を失うという悲惨な状況になった」²³として、さらに「このような時代にデンマーク最初のフォルケホイスコーレであるロイディングホイスコーレがシュレスヴィー北端に開校した」²⁴と記している。またコル（2007b）は、「シュレスヴィー・ホルスタイン問題から来る対ドイツへの民族主義運動の場としてのフォルケホイスコーレづくり、そして農民の社会意識の覚醒による学びの場としての農民ホイスコーレの設立という形で民衆運動として展開された」²⁵と述べている。

これらの文献より、デンマーク人は戦争後に国土が奪われる中で自らを主体に民族意識を考える必要があり、そのために人が集まりデンマーク語で語ることができる場としてフォルケホイスコーレが広まることで、従来の暗記式の詰め込み教育からグルントヴィの思想による「生きた言葉」を重視した民族主義運動を広めることになったといえる。

2. グルントヴィの教育思想

グルントヴィのめざした教育は、自由で対等な立場での対話による相互作用であり、「生きた言葉」によるコミュニケーションと相互理解である²⁶。グルントヴィのいう「生きた言葉」とは、野村（2010）は「生活に根差した（生活実践から生まれた）言葉」²⁷と示し、清水（2007a）は「デンマーク語が語られるとき、その言葉こそが『生きた言葉』である」²⁸と述べている。「生きた言葉」の対語として清水（2009）は、「書物に書かれた言葉はみな『死んだ言葉』である」²⁹とし、文字ではなく人から発せられる言葉が「生きた」と解釈している。つまり、デンマーク語で語ることそのものを「生きた言葉」と称している。したがって自由にデンマーク語で互いに語り合い、コミュニケーションを図ることで互いを理解し合えること自体がグルントヴィの教育だといえる。

3. フォルケホイスコーレの特徴

フォルケホイスコーレは、1844年11月に最初の学校が開設³⁰されて以来、2018年にはデンマーク国内に69校が存在する³¹。フォルケホイスコーレの特徴について野村（2010）と清水（2007a）によると、①入学資格は17.5歳以上で性別や年齢、障害の有無、国籍を問わない、②全寮制であること、③校長ともうひとりの教師は学校の敷地内に移住すること、④試験をしてはいけない、⑤資格を与えてはいけない、と述べている^{32 33}。また、履修できる内容は文学、歴史、自然科学などの伝統的な科目、美術、陶芸、音楽、スポーツなどの趣味を生かした科目、エコロジー、政治学、有機農業、フェミニズムなどの現代的課題の3領域が用意されている³⁴。さらに、フォルケホイスコーレでは何かの技術や知識を習得することに主眼があるのではなく、あくまで授業や討論、実践、実習、3食の食事の準備や片付け、寮を含む校内の清掃等といった生活全般を通して、自己発見をし、これから生きる自分の道を

探すことに力点がおかれている³⁵。筆者は大学在学中に、Gymnastikhojskolen i Ollerupという体操、ダンス、ヘルス・フィットネス、パルクールを中心に学べるフォルケホイスコーレに約1年間留学を行った。そこには、筆者のような留学生のほか、社会に出た後も学び直しとしてフォルケホイスコーレで学ぶ学生も存在していた。このようにフォルケホイスコーレでは、様々な背景をもつ学生と教師が共に共同生活を行いながら、技術や知識の習得が主眼ではなく「新たな自分探し」を目的に開校されている。また、何よりも入学から卒業まで試験を一切実施しておらず、フォルケホイスコーレでの個人技能の高まりは対話によって確認されている。このような成人教育はデンマーク特有の教育制度であり、日本の教育機関には存在しない。

Ⅲ. 青年期の自尊感情、ライフスキルに関する国際的動向

日本と海外の子どもや青年に関する自尊感情については、木野・速水（2009）がローゼンバーグの自尊感情尺度を用いて日本・韓国・シンガポール・カナダ・アメリカの5カ国で大学生を対象に比較を行った調査³⁶や、Schmitt & Allik（2005）の53カ国で成人を対象に比較を行った調査³⁷、大塚（2011）の日本とスウェーデンの大学生を対象に行った調査³⁸が見られる。これらの調査結果において、日本の青年は諸外国と比べて自尊感情が低い結果が報告されている。また、2018年に内閣府が調査した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」³⁹では、日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの7か国を対象に調査が行われ、調査内容には自尊感情の項目が含まれている。回答は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の4件法で実施された。とりわけ質問項目の「自分自身に満足している」や「自分には長所がある」について、日本の若者の「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した者は、各項目で45.1%と62.2%であった。これら割合は同様の回答をした諸外国の若者の割合と比べて低い値であった。一方、質問項目の「自分は役に立たないと強く感じる」に対して、日本の若者の「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した者は51.7%であり、これは最も低い値であったドイツ、フランス、スウェーデンの若者に比べると3番目に高い値であった。これらの結果から、日本の若者の自尊感情は、7か国中で全体的に低い傾向がみられた。

次にライフスキルに関する国際調査は、陳・土屋（2016）が行った中国と日本の大学生を対象とした国際比較⁴⁰がある。ライフスキルを構成する因子の中で、人脈の重視や自己主張、自己統制などに重点をおく「親和性」因子、「リーダーシップ」因子、「計画性」因子については、中国の大学生の平均値が日本の大学生より高い値を示していた。一方で優しさや気遣い、もてなしといった「感受性」因子については、日本の大学生の値が中国の大学生に比べ高かったことを報告している。この結果から、日本の大学生はもてなしや他者への気遣い、思いやりについては中国の大学生より高い傾向ではあるが、相談や本音で話すことによる課題解決での人との関わりについては、低い傾向がみられることが示された。

Ⅳ. 日本とデンマークの青年を対象とした自尊感情、ライフスキルの実態調査

1. 研究目的

日本の高等教育を受けている大学生とデンマークの成人教育を受けているフォルケホイスコーレの学生を対象に、自尊感情とライフスキルに関するアンケート調査を行うことで教育の違いによる両国の学生の特徴を明らかにした。

2. 調査対象者

アンケート調査に同意を得た日本の大学生88名（男性34名、女性54名、平均年齢 18.15 ± 0.39 歳）およびフォルケホイスコーレに通う学生70名（男性23名、女性47名、平均年齢 20.54 ± 2.41 歳）を分析の対象とした。アンケートはWebにて行われた。調査対象者には、調査目的およびアンケートの回答は成績に一切影響されない等を口頭および書面にて説明し、インフォームド・コンセントを得た。本調査は神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2019-29-3）。

3. 調査内容

アンケートは日本語版と英語版による2種類のWebアンケートを作成した。質問項目には属性（性別、年齢、同居の有無）のほか、日本語版アンケートでは桜井（2000）によるローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版⁴¹（表1）および嘉瀬ほか（2016）による青年・成人用ライフスキル尺度（以下、LSSAA）⁴²（表2）を用いた。それぞれの尺度は、得点が高いと自尊感情およびライフスキルが高いことを示すよう設計されている。また、英語版アンケートでは、ROSENBERG SELF-ESTEEM SCALE（Rosenberg, 1965）⁴³および嘉瀬ほか（2016）のLSSAAを英訳した尺度を用いた。LSSAAの英訳については、研究者および日本語が理解できるネイティブスピーカーのチェックを経て作成した。

表1 ローゼンバーグ自尊感情尺度（桜井，2000）

-
1. 私は自分に満足している。
 2. 私は自分がだめな人間だと思う。(R)
 3. 私は自分には見どころがあると思う。
 4. 私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる。
 5. 私には得意に思うことがない。(R)
 6. 私は自分が役立たずだと感じる (R)
 7. 私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。
 8. もう少し自分を尊敬できたらと思う。(R)
 9. 自分を失敗者だと思いがちである。(R)
 10. 私は自分に対して、前向きな態度をとっている。
-

* (R) は逆転項目

表2 青年・成人用ライフスキル尺度 (LSSAA) (嘉瀬ほか, 2016)

「意志決定」因子

16. 入手した情報が信頼できるかどうか適切に判断することができる。
10. 物事の損得について慎重に考えられる。
19. 行動を起こす前に、あらかじめ起こり得るトラブルを想定できる。
9. 多くの情報から自分にとって重要なものを選択することができる。
15. 様々な情報を、わかりやすいように整理できる。
17. 情報をはじめから信じ込まず、信頼できるかどうか適切に判断することができる。
20. 行動を起こす前に、具体的な計画を立てられる。
18. インターネットなどのメディアを使って、有益な情報を集められる。

「対人関係スキル」因子

12. 他人に対して思いやりのある言動をとることができる。
3. 他人の気持ちを考慮した言動をとれる。
4. 他人の話を書くとき、その人の立場に立って気持ちを想像できる。
11. 他人の話すことを親身に聞いて、受け入れることができる。
6. 喜んでいる人がいると、自分も一緒に嬉しい気持ちになる。

「効果的コミュニケーション」因子

1. 自分の素直な気持ちを他人にはっきりと伝えられる。
2. 他人とは異なった独創的なアイデアを生み出せる。
21. 自分自身の考えを他人に理解しやすいように伝えられる。
13. 声を出して笑うなど、自分の感情を素直に表現できる。
8. 初対面の人へ自分から積極的に話しかけることができる。

「情動への対処」因子

14. 悲しいことがあっても、考え方を前向きに変えることができる。
7. つらいことがあっても、悪い方向に考えすぎない。
5. 自分自身の気持ちを落ち着かせるなど感情のコントロールができる。

4. 統計処理

ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版は4件法で「いいえ」1点、「どちらかといえばいいえ」2点、「どちらかというとはい」3点、「はい」4点で構成されている。そして得点が高くなるほど自尊感情が高くなるよう逆転項目を処理し、10項目の合計点を算出した。また、LSSAAは5件法で「まったくあてはまらない」1点から「とてもよくあてはまる」5点で構成されている。本研究ではLSSAAの下位尺度である「意思決定」、「対人関係スキル」、「効果的コミュニケーション」、「情動への対処」の各因子の項目を合計しそれぞれの平均値を算出した。平均値の差の検定には対応のないt検定を行った。データの解析にはIBM SPSS Statistics 25を用い、統計学的有意差を危険率5%未満のものとした。

5. 自尊感情に関する日本とフォルケホイスコーレの学生のアンケート結果

日本の大学生とフォルケホイスコーレの学生の自尊感情得点の分布は、図1、図2に示す。日本の大学生（以下、日本人学生）の自尊感情得点の平均は 25.1 ± 5.01 点、フォルケホイスコーレの学生の

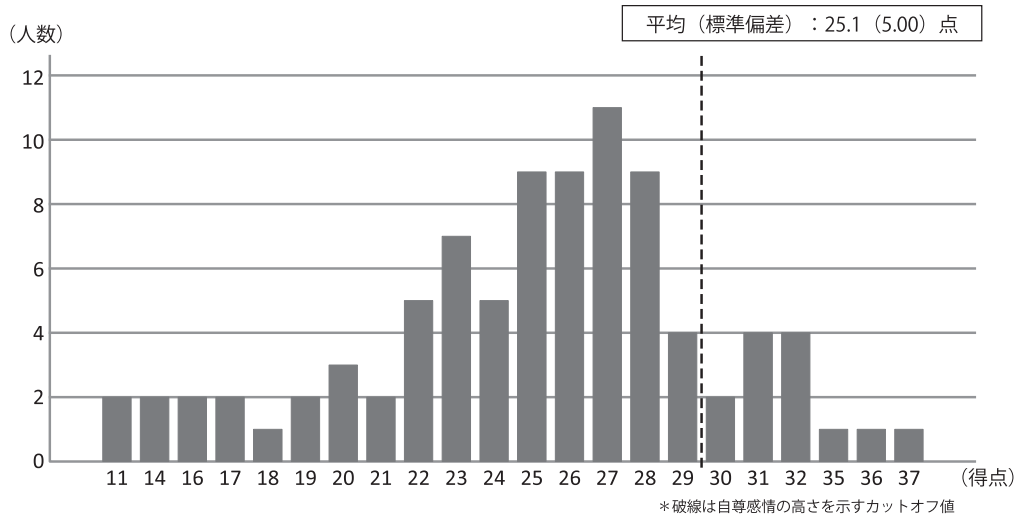


図1 自尊感情得点の分布 (日本) N=88

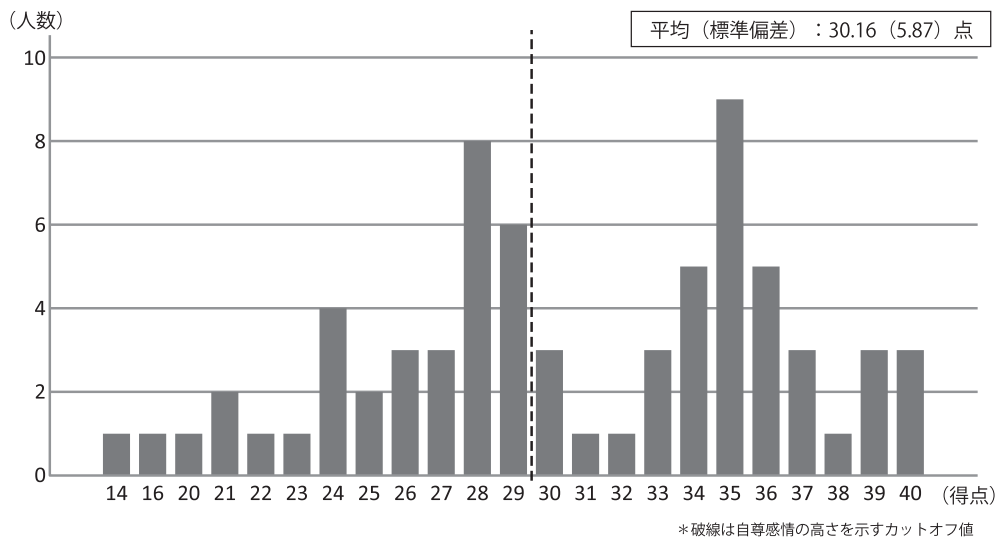


図2 自尊感情得点の分布 (デンマーク) N=70

得点は 30.61 ± 5.87 点であったことから、フォルケホイスコーレの学生の自尊感情得点は日本人学生の自尊感情得点に比べ有意に高い値を示した ($t(135.88) = -6.25, p < 0.01$)。さらに自尊感情の高さを示すカットオフ値について、菅 (1984) は青年の平均の高さは25点あたりを指摘し目安として20点以下を低い、30点以上を高いとみなすことを提案している⁴⁴。本調査では、自尊感情得点が低いとされる20点以下の日本人学生は14人、フォルケホイスコーレの学生は3人であった。一方、自尊感情が高いとされる30点以上の学生数は日本人学生で13人であったのに対し、フォルケホイスコーレの学生が37人であったことから、フォルケホイスコーレの学生は全体的に高い自尊感情を抱いている者が多いといえる。

6. ライフスキルに関する日本とフォルケホイスコーレの学生のアンケート結果

日本とフォルケホイスコーレの学生のライフスキルについてLSSAAの下位尺度である「意思決定」、「対人関係スキル」、「効果的コミュニケーション」、「情動への対処」の各項目について合計し、それぞれの平均値を算出した。各下位尺度における日本人学生とフォルケホイスコーレの学生の平均値について図3に示す。

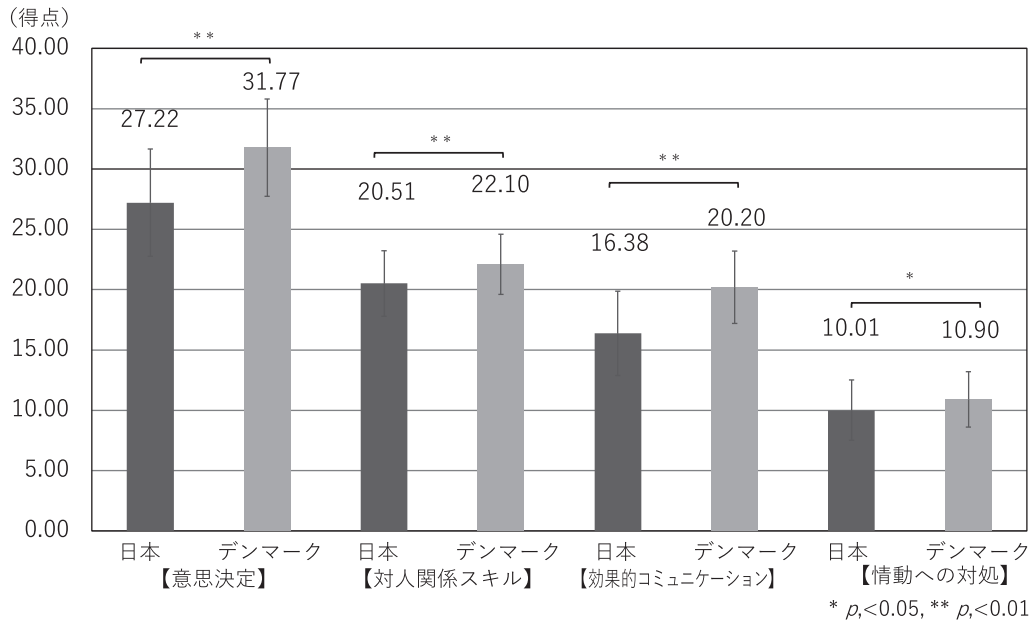


図3 ライフスキル尺度におけるカテゴリ別平均値

「意思決定」については日本人学生の平均得点は 27.22 ± 4.45 点、フォルケホイスコーレの学生の平均得点は 31.77 ± 4.03 点であったことから、フォルケホイスコーレの学生の「意思決定」得点は日本人学生に比べ有意に高い値であった ($t(156) = -6.67, p < 0.01$)。「対人関係スキル」については、日本人学生の平均得点は 20.51 ± 2.72 点、フォルケホイスコーレの学生の平均得点は 22.10 ± 2.49 点であったことから、フォルケホイスコーレの学生の「対人関係スキル」得点は日本人学生に比べ有意に高い値であった ($t(156) = -3.79, p < 0.01$)。また「効果的コミュニケーション」については、日本人学生の平均得点は 16.38 ± 3.50 点、フォルケホイスコーレの学生の平均得点は 20.20 ± 3.01 点であり、フォルケホイスコーレの学生の「効果的コミュニケーション」得点は日本人学生に比べ有意に高い値であった ($t(156) = -7.27, p < 0.01$)。さらに「情動への対処」については、日本人学生の平均得点は 10.01 ± 2.50 点、フォルケホイスコーレの学生の平均値は 10.90 ± 2.30 点であったことから、フォルケホイスコーレの学生の「情動への対処」得点は日本人学生に比べ有意に高い値であった ($t(156) = -2.30, p < 0.05$)。

V. 日本とフォルケホイスコーレの学生の特徴からみた青年期の教育について

日本とフォルケホイスコーレの学生を対象に行った自尊感情の調査では、日本の学生よりもフォルケホイスコーレの学生の自尊感情が全体的に高い傾向であった。さらにライフスキルの調査では、「意思決定」因子、「対人関係スキル」因子、「効果的コミュニケーション」因子、「情動への対処」因子の全ての項目で、日本の学生よりもフォルケホイスコーレの学生の値が高かった。これらのアンケート調査結果から、フォルケホイスコーレの学生は日本の学生に比べて自尊感情とライフスキルが共に高い実態であることが示された。

ライフスキルを構成する各因子とその項目が示す各スキルについて、嘉瀬ほか（2016）によると、第一因子の「意思決定」は、「損益の検討」、「計画性」、「情報の整理や比較」、「メディアでの検索」、「最悪の展開の想像」などの行動や思考を示す項目から構成されており、論理的思考や想像力を用いて問題を効果的に解決するための意思決定を行うというスキルを測定する因子として命名された。第二因子の「対人関係スキル」には、「他者への配慮」、「受容的態度」、「共感的態度」などの行動や思考を示す項目から構成され、他者の言動から気持ちを想像し、それに対する共感を言動で表現するというスキルを測定する因子として命名された。第三因子の「効果的コミュニケーション」には、「効果的自己表現」、「独創的思考」、「アサーティブな態度」、「他者への積極的態度」などの行動や思考を示す項目から構成されており、自分の考えを積極的かつ効果的に他者へ伝えるスキルを測定する因子として命名された。第四因子の「情動への対処」には、「前向きな思考」、「感情の統制」などの行動や思考を示す項目から構成され、自分自身の情動を効果的に統御するスキルを測定する因子として命名された⁴⁵。本研究でのアンケート調査結果から、フォルケホイスコーレの学生は日本の学生に比べて自尊感情とライフスキルが共に高い値であった背景の一つに、ライフスキルを構成する各因子が示すスキルは、授業や討論、実践、実習、食事、清掃等の寮生活全般といった、一日を通して様々な場面で学友や教師と過ごすことで育まれ、対話を通じて他者と関わる機会が日本の大学生に比べて圧倒的に多いことが考えられる。

日本の教育とフォルケホイスコーレの教育について、アンケート調査結果や筆者の留学経験から日本の青年期における教育や在り方の課題について検討すると、第一にフォルケホイスコーレと日本の教育の決定的な違いは、フォルケホイスコーレには入学時や在籍中には試験が実施されることは一切ないことである。つまり、学校では習熟度や評価は成績表による数値で示されるのではなく、学生同士や学生と教師が互いに語り合い、理解し合えることを中核に行われているからだ。事例として筆者の留学経験では、時間割には週1回、半日または全日を利用して、授業を教師が行うのではなく学生同士でその日の授業内容を決め、学生が授業を行うといった活動があった。また、寮で起こる問題を主体的に解決するために、全校生と校長を含む教員が夕食後等に一堂に集まり、民主的に意見交換することで解決を見出すことが当たり前として日常的に行われていた。そのように課内外問わず、常に自分の意見やアイデアを他者に理解できるよう合議的に活動が行われている。さらに筆者のような外国人もデンマーク人と区別なく受け入れられ、筆者の留学先では前期・後期あわせて全校生徒の10%～40%の外国人が在籍し一堂に生活し学んでいた。このためフォルケホイスコーレでは日常的

に、性別、年齢、国籍が異なる学生同士の関わりから、自然と言語や文化的背景の違いを認め相手の気持ち尊重し、積極的かつ効果的に他者へ意見を伝えようとする姿勢が芽生えやすい環境にある。

第二に、フォルケホイスコーレでは学生自身が「新たな自分探し」について、自由に取り組める環境があることである。在学中に何の目標がなくても、そこにいるだけで価値あることとして認められるよう啓蒙しているのである。日本では一定の単位を取得することで学業が修められ、実学や専門職に必要な資格を取得することが可能であるが、成績や成果に関わらずに自己のペースでゆっくりと時間をかけて自分を探ることが可能な教育は行われていない。また、寮生活による成人教育は主流ではない。さらに大学在学中に学業を休学しボランティア活動に長期間従事したり、留学や長期の旅に出かける習慣も主流であると言い難い。そのため、日本の学生に必要なライフスキルや自信を育むためにも、フォルケホイスコーレで行われているような「新たな自分探し」が各自のペースで行えるような時間が尊重される必要がある。つまり、様々な人々との対話による関わりをもち、目的や目標のみを重視しない学びが、自ずとライフスキルを獲得し自尊感情を高めることにつながると考えられる。

VI. まとめ

本研究では、日本とデンマークのフォルケホイスコーレの学生の自尊感情とライフスキルの調査を行うことで、成人教育機関であるフォルケホイスコーレの教育と日本の青年期に求められる教育について検討することを目的とした。

自尊感情ならびにライフスキル調査では、自尊感情ならびに「意思決定」因子、「対人関係スキル」因子、「効果的コミュニケーション」因子、「情動への対処」因子の全項目について、フォルケホイスコーレの学生は日本の学生より高い値であることが示された。その背景として、フォルケホイスコーレで重視されている「新たな自分探し」について対話を中心に自己のペースを尊重して行え、友人をはじめとする様々な人々との対話による関わりや経験を積むことによって、自己形成が行われていることが推察された。

デンマークの成人教育と日本の高等教育の違いをもとに、日本の学生にはテストやレポートといった可視化可能な評価に囚われず、自己のペースを尊重し「新たな自分」について深く考える時間を設けること。そして友人をはじめとする様々な人々との対話による関わりを積極的に行える機会をもつことにより、目的や目標のみを重視しない学びや経験が人生を豊かにする可能性があること示唆された。

注) 日本では国民高等学校と訳されていた。(清水, 2007)

引用参考文献

- 1 中央教育審議会, 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について, 文部科学省, p.1, 2012
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf
(参照日: 2021年1月26日)
- 2 一般社団法人 国立大学保健管理施設協議会, 学生の健康白書 学生と保健管理スタッフのためのダイジェスト

- 版, p.14, 2019
<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/11/hakusho2019.pdf> (参照日: 2021年1月26日)
- 3 WHO 編 川畑徹朗・高石 昌弘・西岡 伸紀・石川 哲也・JKYB 研究会 翻訳, WHO ライフスキル教育プログラム, 大修館書店, p.12, 2012
 - 4 WHO 編 川畑徹朗ほか翻訳, 前掲書, pp.12-13, 2012
 - 5 横山孝行, 学生相談の心理教育プログラムに関する文献的研究ーライフスキルの観点からー, 東京工芸大学工学部紀要, Vol.33, No.2, pp.62-70, 2010
 - 6 Helliwell, J.F., Layard, R., Sachs, J.D., & Neve, J.E.D. (eds.), *World Happiness Report 2020*. Sustainable Development Solutions Network, pp.20-22, 2020
<https://happiness-report.s3.amazonaws.com/2020/WHR20.pdf> (参照日: 2021年1月26日)
 - 7 Helliwell, J.F., Layard, R., & Sachs, J.D., *World Happiness Report 2019*. Sustainable Development Solutions Network, pp.25-27, 2019
<https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2019/WHR19.pdf> (参照日: 2021年1月26日)
 - 8 Helliwell, J.F., Layard, R., & Sachs, J.D., *World Happiness Report 2018*. Sustainable Development Solutions Network, pp.21-23, 2018
https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2018/WHR_web.pdf (参照日: 2021年1月26日)
 - 9 Helliwell, J.F., Layard, R., & Sachs, J.D., *World Happiness Report 2017*. Sustainable Development Solutions Network, pp.20-22, 2017
<https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2017/HR17.pdf> (参照日: 2021年1月26日)
 - 10 Helliwell, J.F., Layard, R., & Sachs, J.D., *World Happiness Report 2016*. Sustainable Development Solutions Network, pp.20-22, 2016
https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2016/HR-V1_web.pdf (参照日: 2021年1月26日)
 - 11 Helliwell, J.F., Layard, R., & Sachs, J.D. (eds.), *World Happiness Report 2015*. Sustainable Development Solutions Network, pp.26-28, 2015
https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2015/WHR15_Sep15.pdf (参照日: 2021年1月26日)
 - 12 鈴木成美, デンマークの福祉における余暇の思想- フォルケホイスコーレと生活指導教員養成大学の活動ととして-, 京都文教大学人間学研究, 7巻, pp.75-87, 2007
 - 13 谷雅泰: 序章, 谷雅泰・青木真理 (編), 転換期と向き合うデンマークの教育, ひとなる書房, pp.11-22, 2017
 - 14 清水満, 生のための学校ーデンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界ー, 新評論, p.21, 2007a
 - 15 小島ブンゴード孝子, 福祉の国は教育大国ーデンマークに学ぶ生涯教育ー, 丸善出版, p.174, 2004
 - 16 田渕宗孝: フォルケホイスコーレ, 村井誠人 (編), デンマークを知るための68章, 明石書店, pp.246-251, 2017
 - 17 野村武夫, 「生活大国」デンマークの福祉政策ーウェルビーイングが育つ条件ー, ミネルヴァ書房, p.167, 2010
 - 18 清水満, 共感する心、表現する身体ー美的経験を大切にー, 新評論, p.10, 2009
 - 19 清水満, 前掲書, pp.89-90, 2007a
 - 20 野村武夫, 前掲書, p.173, 2010
 - 21 野村武夫, 前掲書, pp.168-169, 2010
 - 22 岩原武則, グレントヴィの生い立ちと現在のデンマーク, 1994年5月19日講演要旨, 東海大学望星塾リーフレット94, Vol.2, p.6, 1994
 - 23 高井久光・工藤亘, デンマーク体操の歩み (1) 17世紀ー19世紀, 玉川学園・玉川大学健康・スポーツ科学研究紀要, 15巻, pp.29-33, 2014
 - 24 高井久光・工藤亘, 前掲書, pp.29-33, 2014

- 25 クリステン・コル, 清水満 翻訳, コルの「子どもの学校論」－デンマークのオルタナティブ教育の創始者－, 新評論, pp.16-17, 2007b
- 26 野村武夫, 前掲書, p.173, 2010
- 27 野村武夫, 前掲書, p.172, 2010
- 28 清水満, 前掲書, p.103, 2007a
- 29 清水満, 前掲書, p.99, 2009
- 30 Foreningen af Folkehøjskoler I Danmark Home page
<https://www.hojskolerne.dk/om-hoejskole/hvad-er-en-hoejskole/hoejskolens-historie/> (参照日: 2020年12月7日)
- 31 原義彦, フォルケホイスコレの基本価値の類型化と自己評価, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第41号, pp.85-96, 2019
- 32 野村武夫, 前掲書, p.191, 2010
- 33 清水満, 前掲書, p.21, 2007a
- 34 野村武夫, 前掲書, p.191, 2010
- 35 清水満, 前掲書, p.21, 2007a
- 36 木野和代・速水敏彦, 仮想的有能感の形成と文化的要因－大学生を対象に－, 日本教育心理学会, 第51回総会発表論文集, p.26, 2009
- 37 Schmitt, D.P., & Allik, J., *Simultaneous Administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale in 53 Nations: Exploring the Universal and Culture-Specific Features of Global Self-Esteem*. Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 89, No. 4, pp.623-642, 2005
- 38 大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦, 価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究 第1次報告, 『人間科学研究』文教大学人間科学部, 第33号, pp.105-119, 2011
- 39 内閣府, 子供・若者白書, 令和元年版
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/pdf/b1_00toku1_01.pdf (参照日: 2020年10月27日)
- 40 陳昱龍・土屋裕睦, 大学生におけるライフスキルに関する中国と日本の国際比較－中国語版日常生活スキル尺度の作成－, スポーツ産業学研究, Vol.26, No.1, pp.1-12, 2016
- 41 桜井茂男, ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討, 筑波大学発達臨床心理学研究, 12巻, pp.65-71, 2000
- 42 嘉瀬貴祥・飯村周平・坂内くらら・大石和男, 青年・成人用ライフスキル尺度(LSSAA)の作成, 心理学研究, 第87巻, 第5号, pp.546-555, 2016
- 43 Rosenberg, M., *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press, pp.305-307, 1965
- 44 菅佐和子, SE (Self-Esteem) について, 看護研究, 17巻, 2号, pp.117-123, 1984
- 45 嘉瀬貴祥・飯村周平・坂内くらら・大石和男, 前掲論文, pp.546-555, 2016

キーワード: ライフスキル、自尊感情、国際比較、成人教育機関、フォルケホイスコレ、デンマーク